

「スーパーパードッグ ブルース」

僕ぼくの名前は健二なまえ けんじ。小学校三年生の男の子だしょうがっこうさんねんせい おとこ こ。元気で動物が大好きげんき どうぶつ だいす。中でも犬がなか いぬ一番好きで、ブルースという名前の犬を飼っているんだいちばんす なまえ いぬ か。小型犬という種類で、大こがたけんきさは僕のひざよりもずっと低い。色は真っ黒で、目はくつきりと大きい。歳は人間おお とし にんげんでいうと百歳を超えるおじいちゃんだ。ブルースが小さいころは走るのがとてもひやくさい こ早くて、まるでラジコンカーみたいにビュンビュン走ったものさ。でも今は走ることはしともなく、ずっとお気に入りきいのソファの上で一日中寝むったきりうえ いちにちじゅうね。ゴハンもあまり食たべない。病院にもよく連れていくし、おまけに白内障という目の病気びょういんでまわりがほとんど見えみないんだ。歩き出すといすに頭あたまをゴツンとしよっちゆうぶつけ

ちやう。見ていて僕はとてもかわいそうになつちやうよ。だから僕は学校から帰るとすぐに寝ているブルースのそばに来て、背中をなでてやるんだ。そうして学校でおこった出来事を話すのさ。するとブルースは「ありがとう」とでも言うように頭を少し上げて、僕のほうに近づけるんだ

さあ、夜になって寝る時間がきた。ふとんをしいて、お父さんとお母さんの間に寝るのがいつもの決まり。一人ではまだ寝れないよ、だってこわいもの。でも、今日はいつもと違うんだ。僕は勇気を出してブルースといっしょに寝ることに決めただ。さみしいかな、と思ったからさ。

「さあ、おいでブルース」

僕はブルースの横になった。ブルースはいつもと変わらず、ずっと静かに目を閉じ

ている。心配しんぱいそうに見みているお父とうさんとお母かあさんに

「大丈夫だいじょうぶだよ」といって僕ぼくは電でん氣きを消けした。

「起おきてよ、健けん二じくん」

となりで声こえがして、僕ぼくは起おきたんだ。まわりを見み回まわすと、近ちかくの公こう園えんなのさ。

「びっくりしたかい、健けん二じくん」

振ふりかえると、なんとブルースが二本足にほんあしで立たっている。おまけに黒くろい背せ広びろを着きて、

頭あたまにはシルクハット、首くびには蝶ちょうネクタイなんかつけているんだ。

「さあ、健けん二じくん、夢ゆめの世界せかいへようこそ。僕ぼくの背せ中なかにお乗のり。冒ぼう険けんへ出でかけよう」

ブルースはそういうと、犬いぬらしく四よつんばいになった。

「ブルース、どうしてしゃべれるんだい。おまけに僕ぼくが乗のったらつぶれてしまうよ」

「大丈夫だいじょうぶだよ、健けん二じくん。ここではなんでもできるスーパードッグさ」

僕はおそろおそろブルースにまたがった。すると不思議なんだ。つぶれるどころかブルースの筋肉がすぐくこんもりしている。毛並みだつてツヤツヤで、外国の高級なジュウタンのようだ。

「さあ、いくよ健二くん。しつかりつかまつて」

ブルースは僕を乗せてかけ出したんだ。

「うひゃあ」

僕は思わず声を上げた。ものすごいスピードなんだ。耳の後ろで風がビュウビュウ流れる音が聞こえる。ジェットコースターなんて比べものにならないさ。でも、とても気持ちがいいんだ。ブルースはさらに早く走り出した。もう、目をあけているのがやつのくくらい。そういえばブルースが小さい頃はとても走るのが早かったな。元気なころに戻ったみたいだ、と僕は思った。目の前に大きな川が見えた。ブルー

スはそのままジャンプして飛び越えた。まるで鳥になったかのようにさ。今度はジヤングルの中に入っていた。今まで見たことのない大きな木がたくさんある。きれいな緑色の世界がどこまでも広がってとてもきれいだ。ブルースは僕を乗せたまま迷路のようなたくさんさんの木を右へ左へと上手にかわしていく。本当にスーパードツグだ。

「健二くん、少し休けいするかい？」

ブルースはやさしく僕を降ろしてくれた。

「おなかはずいてないかい？いいものをとってくるよ」

ブルースはそう言ってしげみの奥へと入っていくとすぐに戻ってきた。口にはおおきなパイナップルをくわえている。

「ありがとう」

僕はそう言いってパイナップルをほおばあまった。甘あまくてみずみずしく、とてもおいしい。遠とくにある火山かざんがふんかをした。大きな音おとがして山やまのてっぺんから赤あかい炎ほのおがふきだしている。でもちつともこわくないさ。だってスーパードッグといっしよだもの。

「じゃ、帰かえろうか」

「うん」

僕ぼくはもつと遊あそびたかったけど、帰かえることにした。帰かえりもブルースは飛とび跳はねるようはしに走はしった。ブルース背せなか中に乗のりながら、ブルースがとてもあたたかいことを知しったんだ。僕ぼくたちは初はじめにいた公園こうえんに着ついた。なんだかとてもなつかしい気きがしたよ。ブルースはゆっくりと僕ぼくをおろした。とたんになんだか急きゆうに眠ねむくなり、僕ぼくはベンチよこに横よこたわっていつの間まにか眠ねむってしまっただ。ち

「朝あさよ、健けんじ二。ちこくしちやうわよ」

お母かあさんの声こえがして、僕は飛とびおきた。目めを開あけるといつもの家いえの中なか。となりでブルースはかわらず眠ねむっている。やっぱり夢ゆめか、でも楽たのしかったな。僕はぼく一人ひとりで笑わらつてふとんから起おきだした。

その日ひの夜よるになつた。僕はぼくブルースといっしよに寝ねることにした。また大冒険だいぼうけんができる、と思おもつたからさ。今度こんどは、まくらのそばに買かつたばかりの運動靴うんどうぐつをおいたんだ。だって昨日きのうは古ふるい靴くつだったからしよっちゅうぬげそうになつたもの。

「おやすみ、ブルース」

とつくに寝ねているブルースん背中せなかをそつとなでて、僕はぼく目めを閉とじた。

「さあ、おきて健二けんじくん。冒険ぼうけんのはじまりだよ」

昨日きのうと同じ公園おな こうえんでブルースに起おこされ、僕はぼく目めを開あけた。

「さあ、今日はすてきな海の中を案内してあげるよ。準備はいいかい？」

「うん、よろしくね」

僕はブルースの背中に飛び乗った。とたんにブルースは風のように走り出した。

しばらくいくと、大きな海に着いた。青い鏡のように透き通っていて、波ひとつ

たつていない。砂は白く星の形をしていて、手でさわるとサラサラしている。僕ら

の他には誰もいない。僕はお気に入りの靴をぬいだ。だってぬれちゃうからね。

「海の中へ入るって、息はできるの？」僕はこわくなって聞いてみた。

「心配いらないよ、さあ行こう」

ブルースは僕をのせたままゆっくりと海へと入っていった。やっぱりスーパードツ

グなんだな、息も出来るし、目も開けれる。ちっとも苦しくないんだ。海の中は絵

本や写真で見るよりも、もつとすてきだった。太陽の光がうつすらと差し込んで、

カーテンのようにゆれている。たくさんの黄色い小さい魚が目の前を横切っている。お花畑のような色とりどりのサンゴが僕らに手を振るように左右にゆれている。

「健二くん、もつとすごいものを見せてあげるよ」

ブルースはさらに沖へと泳ぎだした。すると頭の上になにか大きな黒いかげができた。なんだろう？僕は頭を上げた。そこには大きなジンベイザメが泳いでいた。青い体に白いもようが沢山あって、おなかにはコバンザメがぴったりとくっついてる。まるで大きな船が海の中をゆっくりと進んでいるようだ。僕は首が痛くなるくらいに見上げていた。

「すごいだろう、健二くん」

ブルースはとくいそうに言ったんだ。

そして、いつものふとんの中で朝なかがきた。

ブルースは横よこで眠ねむっている。僕はあわてて服ふくをさわった。ちつともぬれてない。やつぱり夢ゆめだったのか。僕は少し残念ぼく すこ ざんねんな気がした。

枕まくらのそばを見ると、あれ、買ったばかりの運動靴うんどらぐつがない。昨日きのうの夜よるちゃんと枕まくらのそばにおいたのに。そうか、夢ゆめの中で砂浜すなはまにおいたままだった。でも・・・さがしている時間じかんはもうない。早く学校はや がっこうにいかなくちや。僕はもどかしい気分きぶんのまま学校がっこうへ行いったんだ。

学校がっこうから帰かえると事件じけんがおきていた。ブルースがいなくなっていたんだ。僕ぼくがあわてて玄関げんかんのドアを開あけたままにしていたんだ。おそらくそこから逃にげ出だしたのだろ

う。ふだんはめったに玄関げんかんなんていかないのに。そう、僕ぼくのせいなんだ……夜よるになってもブルースは帰かえってこなかった。

「がっかりするなよ、健二けんじ」

お父とうさんが優やさしく言いった。

「ブルースは目めがみえないから、車くるまにひかれてなければいいけど……」

お母かあさんがつぶやくように言いった

僕は一人ひとりへやにこもって大おお声こゑで泣ないた。

「ごめんよ、ブルース」と何なん度ども言いながら。

ノドがカラカラになって、体からだ中の水分じゆう すいぶんが涙なみだで出でちやうんじやないか、と思おもうくらい泣ないたんだ。次の日つぎ ひの朝あさ、不思議ふしぎなことが起おきたんだ。ちゃんとブルースが帰かえって、いつものソファで寝ねていたんだ。いつでも帰かえってこれるように玄関げんかんのド

アは開あけておいたけど、まさか一人ひとりで戻もどるなんて。僕ぼくらはおどろきながらも、とてもよろこんだのさ。

「ごめんよ、ブルース」

僕ぼくはやさしくブルースの背せ中なかをなでた。するとブルースの後ろうしろに夢ゆめでなくしたあの運動靴うんどぐつがあつたんだ。昨日きのうはたしかになかったはずなのに……ということは……

「もしかしてブルース、あの砂浜すなはまに行いって靴くつを取りにいつていたのかい？」

僕ぼくはためしに聞きいてみた。するとブルースは「うん」とでもうなずくように頭あたまを少すこし動うごかしたんだ。

(伊礼いれい
健一けんいち)

